

〔調査報告〕

現代アーティスト嶋本昭三とパフォーマンス

遠藤 保子*

2005年、現代アーティスト嶋本昭三は、立命館大学工学部教授杉山進と共に世界最小のアート作品であるナノアートを制作し、テレビフラッシュアートミュージアム（イタリア）で発表した。筆者も彼らとイタリアへ同行し、ナノアートを背景にパフォーマンスを行ってきた。本稿では、その体験をもとに次の4点について報告する。1. ナノアートとパフォーマンス：ナノアートの制作プロセスとナノアートを背景にしたパフォーマンス 2. 嶋本昭三の略歴：主なアート作品と活動の概略、3. 嶋本昭三の特筆すべきアート作品：メールアート、女拓、スキンヘッドアート、4. 嶋本昭三が影響を受けた要因。嶋本昭三は、前衛的、革新的、衝撃的なアート作品を発表するだけでなく、女性差別をアピールし、アメリカインディアン・デニス・バンクスが企画した人種問題や地球汚染を訴えてヨーロッパをリレーで走るセイクレッド・ランにも参加している。さらに、嶋本昭三が影響を受けた要因としては、1. 吉原治良の指導 2. 海青寺にある南天棒の書 3. 幼児や知的障害児の影響 4. さまざまな人々とのネットワークが指摘される。

キーワード：ナノアート、パフォーマンス、嶋本昭三、メールアート、女拓、スキンヘッドアート

はじめに

嶋本昭三は、世界的に有名な現代アーティストの1人である（写真1参照）。それは、ロサンゼルス現代美術館で開催された『アクションの中から—パフォーマンスとオブジェ展』で、戦後現代美術の起源となった4大アーティストの1人¹⁾に選ばれ、またアメリカの美術大学の教科書『アートヒストリー』（1999：1124）に日本の現代アーティストとして掲載され、パリのボンピドーセンターにおける“日本の前衛展”やヴェネチアビエンナーレにおいて日本人招待

者に選ばれたことなどからも明らかである。嶋本昭三は、日本の前衛美術史に大きな足跡を残した具体美術協会結成（1954）に参加して以来、これまで前衛的、革新的、衝撃的なアート



写真1 スキンヘッドアートが表紙になった雑誌『Flash Art』と嶋本昭三 筆者撮影

* 立命館大学産業社会学部教授

作品を発表し続けている。例えば、歩きながら身体で感じるアート作品を制作し、大砲の筒に絵の具の弾を入れてキャンバスにぶつけて絵を描く作品を発表し、それをきっかけに、ビン詰めした絵の具をキャンバス上で炸裂させる「ビン投げ」手法²⁾をあみ出した。また、郵便物を媒介に世界の人々とネットワーキングをはかるメールアート、全身に墨を塗った女性がキャンバスの上に横たわりさまざまなシルエットを描く女拓、剃った頭に絵やメッセージを描くスキンヘッドアートなど、実にさまざまなアート作品を発表している。

そして2005年、嶋本昭三は、立命館大学理工学部マイクロ機械システム工学科教授杉山進(ナノテクノロジー専攻)と共に歯ブラシの毛先端平面をキャンバスにして世界最小のアート作品(以下ナノアート)を制作し、イタリアで発表した。その際、筆者も彼らとイタリアへ同行し、ナノアートを背景にパフォーマンスを行ってきた。

そこで本稿では、この体験をもとにしながら次の4点について報告する：1. ナノアートとパフォーマンス：ナノアートの制作プロセスとナノアートを背景にしたパフォーマンス 2. 嶋本昭三の略歴：主なアート作品と活動の概略

3. 嶋本昭三の特筆すべきアート作品：メールアート、女拓、スキンヘッドアート 4. 嶋本昭三が影響を受けた要因

I. ナノアートとパフォーマンス

I・1 ナノアートの制作プロセス

嶋本昭三は、世界一小さな絵を描くために、前述した杉山進の協力を得てナノアートを制作した。これは、アートとサイエンスの融合であ

り、アーティストとサイエンティストとのコラボレーションともいえる。彼らの作品を制作するときの基本的なコンセプトは、以下の3点である。

1. アーティストは、自らの創造力とセンスで人間が作り出したあらゆる道具を使って芸術を表現し、人間に感動を与えなければならない。
2. サイエンティストは、自ら発見・発明した知識と道具で人間に幸福を与えなければならない。
3. それぞれの最先端である現代アートと先端科学技術がコラボレートし、最先端の道具で人間に感動と幸福を与えよう。

このコンセプトをもとに、歯ブラシを利用して以下を行った。

1. 世界一小さなキャンバスは、歯ブラシの毛10ミリの先端(直径=約200ミクロン)である。
2. 原画(嶋本昭三の関係者制作)をデータ変換し、自動描画プログラムを作成する。
3. 波長248nmのエキシマレーザー光を利用し、直径50 μm スリットを經由しレンズでレーザー光りを5 μm に絞り歯ブラシの先端平面に彫刻する(図1, 2参照)。
4. ナノアートは、顕微鏡を通してCCDカメラで撮影し、プロジェクターで歯ブラシの毛先端平面のキャンバスに描かれたナノアートを1000倍以上に拡大投影して皆で観る(図3, 4, 5参照)。

I・2 ナノアートを背景にしたパフォーマンス

2005年5月26日、筆者は、イタリア中部の町トレビにあるトレビフラッシュアートミュージアム Trevi Flash Art Museum において、プロジェクターで拡大投影されたナノアートを背景に、2名のパフォーマーとともにパフォーマンスを行った。図1からも明らかのようにナノア

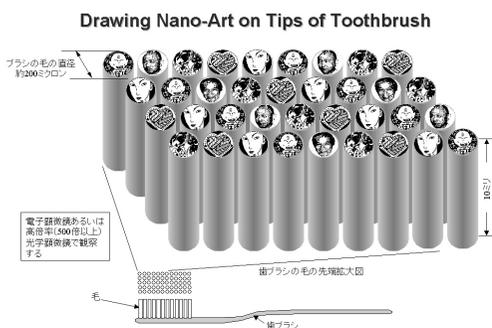


図1 歯ブラシの毛先端平面をキャンバスにしたナノアート

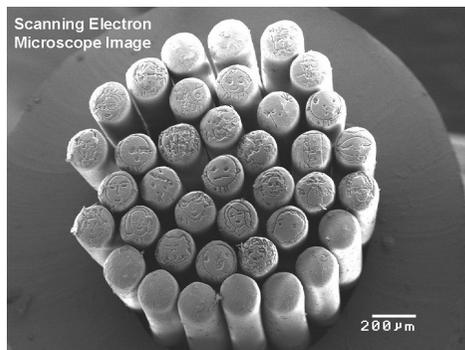


図4 拡大投影されたナノアート1

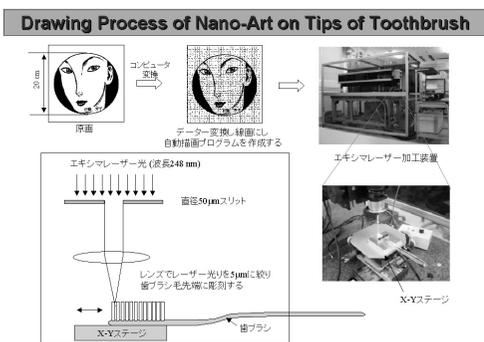


図2 歯ブラシの毛先端平面に描くナノアートの制作プロセス



図5 拡大投影されたナノアート2 (図1～5 杉山進制作)

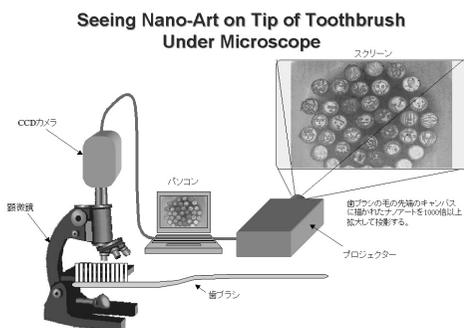


図3 拡大投影されるナノアート



写真2 ナノアートを背景にしたパフォーマンス 右：筆者

ートには、さまざまな人生を象徴させたような人々の顔、その人々の心を想起させるハートの模様などが描かれている。

そこで、パフォーマンスは、ナノアートのキャンバスが人生であり、生きている人々自身が

アートであることをキーワードに、ポストモダンダンスの特性でもあるダンステクニックを排除し、日常的な動きを導入し、最小の動きを反復し、インプロビゼーションも交えながら、欣喜雀躍、意気消沈など、喜怒哀楽の諸相を天衣

無縫、自由奔放、自由闊達に表現した（写真2参照）。

筆者は、このパフォーマンスを実践しながら次のことを実感した：1つは、パフォーマーに投影されたナノアートの光と影が、パフォーマーが動くことによって息を吹き返し、生命が与えられたかのようなこと。2つは、従来の照明とは異なってナノアートの光と影がもう1人のパフォーマーに変身し、つまりバーチャルなパフォーマーとなって、競演しているかのようなこと。このような実感に関して、芸術とは虚のダイナミックイメージであると指摘したS. K. ランガーに準拠して考えるなら、ナノアートとパフォーマンスの世界では、パフォーマーがパフォーマンスを行うことによって生じる虚のダイナミックイメージと拡大投影されたナノアートから発せられる虚のダイナミックイメージが相乗効果をもたらし、これまでにないユニークな世界が生成されたと思われる。

さらに、パフォーマンス終了後の筆者は、今まで味わったことのないダイナミックな躍動感、ナノアートと共に行ったという達成感、そしてその結果として幸福感を味わった。これは、ナノアート制作の際の基本的なコンセプトである“人を感動させ幸福にする”ということに通じるものである。

さて、このパフォーマンスを鑑賞した観客の反応はととても好意的であり、終了後は拍手喝采が鳴り止まなかった。ナノアートという世界で最も小さいアートは、パフォーマーにも観客にも大きな感動と幸福感をもたらしたと思える。

II. 嶋本昭三の略歴

嶋本昭三の略歴に関して、主なアート作品と

活動をまとめると以下のようになる。この内容は、『SHOZO SHIMAMOTO NETWORKING』、『AU Art unidentified』、『嶋本昭三短信』、新聞記事、および嶋本昭三の聞き取り調査³⁾を行なった結果である。また、『20世紀の美術』を参考にしながら、芸術・社会の出来事を付記した（表1参照）。

嶋本昭三は、1928年、大阪市に生まれ、1947年、吉原治良に師事、1950年、関西学院大学文学部を卒業した。絵を描くきっかけは、好きな異性がいなくなった悲しみを紛らすために始めた（嶋本昭三1988：2）。また師匠である吉原は、嶋本昭三（1994：85）によれば、弟子たちの作品制作について、技術面ではなく根本的な姿勢に対して「誰もやったことのないことをやれ」という方針を一步たりとも譲らなかった、という。大学卒業後は、公立中学校の絵の教師になった経験から幼児及び知的障害を持つ生徒に大きな影響を受けた（嶋本昭三2001：101）。

1949～1952年、のりではありあわせた新聞紙をキャンバス代わりに使用し、「穴」の作品を発表し、1952年、モダンアート展協会賞受賞し、1954年、具体美術協会結成（1972年解散）に参加した。その翌年の1955年、芦屋河畔松林で「真夏の太陽にいどむ野外モダンアート実験展」で作品の上を歩き身体で感じるという画期的な作品を発表した。1956年、西宮浜において大砲状の筒の中にカーバイトを入れアセチレンの爆発によって、絵の具の弾をキャンバスにぶつけて絵を描く大砲絵画をきっかけに、トレードマークともいべきピン詰めした絵の具をキャンバス上で炸裂させる手法をあみ出した。特筆すべきは1993年、100周年を迎えるヴェネチアビエンナーレの企画テーマ「東方への道」におい

て、この野外展示作品がヴェネチアで再現されたのである。嶋本（1994：318-320）は、その時の様子を以下のように述べている⁴⁾：

この野外展は、芸術作品が環境と融合することによって新しい別のものを生むというシミュレーションである。この新しい試みに対して、ヨーロッパ人はいち早く注目してくれた。(略) ビエンナーレの主要会場、ジャルディーニでは、芦屋の松林よりもっと多くの樹木が茂っていた。そこはヴェネチアの街の東端にあり、運河も少なく緑がいっぱい、各国のパビリオンが点在している。具体は会場の入口に近い場所をすっかり占拠することになった。オリバー氏が具体の出品に大きな意義を認めてくれたのである。この会場で、1956年のぼく達の画期的な提案は、より効果的に実現した。(略) ぼくは今回6点のアートを出品したが、そのひとつに10メートル×10メートルのビニール布を並木に吊るした作品がある。これは大きな風を受けることになるので、下のほうは固定しなかった。すると、この巨大なビニール布は風が吹く度に木々に絡まり、並木と風で演出された。

そしてアラン・カプロ⁵⁾も、「具体」は日常的な行為を芸術に変えたさきがけであり、西洋に大きな影響を与えたとしている、と指摘している。

その後1957年、大阪サンケイ会館で具体美術展に舞台の上でストーリー性がなく、視覚と時間性に限定した“破壊”のパフォーマンスを実践し、舞台を使用する具体展に前衛芸術映画を発表し、1958年、大阪朝日会館で2台の異なった映画を同時にスクリーンに映像するパフォーマンスを発表する。1960年、大阪高島屋で「国

際スカイフェスティバル—空中展」開催、1961年、具体ニューヨーク展、1968年、神戸新聞社平和文化賞を受賞した。1975年、アーティストユニオン（AU）に参加、1976年、AU全国合議体事務局長就任、メールアートを海外に活発に発表し、武庫川河原に新聞紙1万枚を並べ4台のヘリコプターに取材される。1979年、兵庫県近代美術館で吉原治良とその後の具体展、1981年、東京都美術館にて1980年代をに成る現代作家の出発展、1983年、デュッセルドルフ日本週間展、1985年、マドリードの具体展出席、その後東ヨーロッパなど10カ国でパフォーマンスを発表する。1986年、イタリアメールアートの巨匠 G. カベリーニを日本に招聘し、パリのポンピドーセンターにおける「日本の前衛展」に招待され、その後ヨーロッパ各国でスキンヘッドに平和やその他のアートを描いてもらう。また同年、オーデンバーグ（独）においてシュビッター 100年祭パフォーマンス、ブラジル現代国際美術展プロデュース、原子爆弾製作者バーン・ポーターの主催する『進歩思想学会 The Institute of Advanced Thinking』よりメールアート学者に任命される。1987年、ダラス美術館におけるマルセル・デュシャン100年祭に招待されパフォーマンスを行い、同時にアメリカ、カナダの10箇所をまわりスキンヘッドに平和やその他のメッセージを書いてもらい、頭にスライドを映すパフォーマンスを行う。1988年、広島にて平和パフォーマンス・シンポジウム開催、アキノ大統領よりスキンヘッドへのメッセージが届く。1989年、京都国際会議場にて差別撤廃のパフォーマンスを実践した。

表1 嶋本昭三の略歴と芸術・社会の出来事

年	主な出来事	美術・社会の出来事	年
1928	大阪市生まれ	メキシコ壁画運動	20s-30s
47	吉原治良に師事	マティス『ヴァンスの礼拝堂』の内装制作	47-51
50	関西学院大学文学部卒業		
49~52	新聞紙をキャンバス代わりに使用し、「穴」の作品発表	朝鮮戦争勃発	50
52	モダンアート展協会賞受賞	米、抽象絵画・彫刻展でアクション・ペインティングの語が公認	51
54	具体美術協会結成に参加		
55	芦屋河畔松林で「真夏の太陽にいどむ野外モダンアート実験展」。作品の上を歩き身体で感じるという作品発表	カッセル、第1回「ドクメンタ」	55
56	西宮浜で大砲絵画を描く	初のポップアート、R・ハミルトンのカラージュ〈いったい何が今日の家庭をこれほどまでに変え、魅力的にシテイルノカ?〉が展覧	56
57	大阪サンケイ会館で具体美術展に舞台の上でストーリー性がなく、視覚と時間性に限定した“破壊”のパフォーマンス		
58	大阪朝日会館で2台の異なった映画を同時にスクリーンに映像するパフォーマンス	NYグッゲンハイム美術館竣工	58
60	大阪高島屋で「国際スカイフェスティバル—空中展」	カプロー〈6つの部分から成る18のハプニング〉	59
61	具体ニューヨーク展	ナムジュンパイク「ビデオアート」	65
68	神戸新聞社平和文化賞受賞	石油ショック	70~74
75	アーティストユニオン（AU）に参加	パターン&デコレーション運動	75頃
76	AU全国合議体事務局局長就任、メールアートを海外に発表	「ニュー・イメージ・ペインティング」展	78
79	兵庫県近代美術館で吉原治良とその後の具体展		
81	東京都美術館80年代をになう現代作家の出発展	新表現主義の展覧会	81
83	デュッセルドルフ日本週間展		
85	マドリッドの具体展出席、東ヨーロッパなど10カ国でパフォーマンス	海藤和「再構成・日本の前衛美術」（エジンバラ他巡回、嶋本昭三作品含）	85
86	イタリアメールアートの巨匠G.カベリーニ日本招聘、パリのボンピドーセンターでの「日本の前衛展」招待、ヨーロッパ各国でスキンヘッドに平和、その他のアートを描いてもらう。オーデンバーグ（独）においてシュピッター100年祭パフォーマンス、ブラジル現代国際美術展プロデュース、原子爆弾製作者バーン・ポーター主催『進歩思想学会 The Institute of Advanced Thinking』よりメールアート学者に任命	ソナベント画廊グループ展「ネオ・ジオ」台頭	86
		世田谷美術館誕生	86
87	ダラス美術館におけるマルセル・デュシャン100年祭招待されパフォーマンス、同時にアメリカ、カナダの10箇所を周りスキンヘッドに平和その他のメッセージを書いてもらい、スライドを頭に映すパフォーマンス	アンディ・ウォーホル没	87

88	広島にて平和パフォーマンス・シンポジウム開催、アキノ大統領よりスキンヘッドへのメッセージ届く	「MONOHA」展（国立ローマ大学所属現代美術実験美術館）	88
89	京都国際会議場で差別撤廃のパフォーマンス	セゾン美術館、横浜美術館開館	89
90	デニス・バンクスの”ヨーロッパ聖なるラン7,000キロセイクレッド・ラン、花と緑の万博イベントプロデュース	NY, リチャードセラのパブリック・アート、数年にわたる裁判論争後撤去	89
91	ダルムシュタット市立マチルデンヘーエ美術館“具体展”招待、大阪で廃ビルを解体されるまでの美術館『Time Rack』	「ヘルタースケルター90年代のLAアート」展	91
92	障害を持つアーティストによる『とっておきの芸術祭』をプロデュース	「初期のルオー展」ポンピドーセンター	92
93	生きている人間が壁面に展示される『嶋本昭三作品展』	「ホイットニー・バイエニアル」展でポリティカル・アート注目	93
95	女拓開始	中国人アーティストの台頭	95
96	フィンランドで女拓開催	第1回光州ビエンナーレ（韓国）	95
97	ブラッセル市内ダマススライネアートギャラリーにおいて頭のアート展示とパフォーマンス、梅田で十字架アートの館、ケルンのアルミン・フンデルトマルクにおいて個展		
98	心斎橋で空中磔パフォーマンス、サザビーズのオークションで「穴」の作品28,000ドルで落札、ロサンゼルス現代美術館で美術展アクションの中から：パフォーマンスとオブジェクト展で2点招待	「アウト・オブ・アクションー行為と物体のはざままで」展（MoCA）	98
99	アラン・カプローより講演（具体と21世紀のアートの展望）とパフォーマンス（ビン投げと女拓）の招待、フランスの城で熱気球に乗り作品（21の願いの色を投下）制作、パリの近代美術館で具体展開催。具体展はその後約2年間でバルセロナ、イタリア、ミネアポリスなどを巡回。西宮ヨットハーバーにてクレーンに吊るされて空中から絵の具を落下させるクレーン・パフォーマンス	「20世紀、ドイツにおけるこの1世紀のアート」展（ノイエ・ナショナルギャラリー）	99
2003	ヴェネチアビエンナーレ招待され、ビン投げパフォーマンス。京都ビエンナーレにおいて嶋本昭三と弟子の作品『嶋本ミームの教室』展示	トーマス・クレンズによる「ナムジュン・バイク」回顧展（グッゲンハイム美術館）	2000
04	京都国立近代美術館で「痕跡—戦後美術における身体と思考」作品展示、ヴェネチアビエンナーレの殿堂カ・ペーザロで個展、カ・ペーザロの美術館に3点取蔵		
05	東京国立近代美術館で「痕跡—戦後美術における身体と思考」作品展示、本稿で取り上げたテレビの美術館でナノアートとパフォーマンス、サッカー場でヘリコプターパフォーマンス		
06	ナポリダンテ広場でクレーン・パフォーマンス		

1990年、アメリカインディアン人のデニス・バンク스가企画した人種問題や地球汚染を訴えてヨーロッパ7,000キロをリレーで走るセイクレッド・ランに参加し、花と緑の万博イベントをプロデュースした⁶⁾。1991年、ダルムシュタット市立マチルデンヘーエ美術館“具体展”に招待され、また大阪市中心区にある廃ビルを解体されるまでの間、美術館『Time Rack』⁷⁾にする。1992年3月17日から3日間、大阪湾沿いの天保山ハーバービレッジにおいて、日本で初めて障害を持つアーティストが一堂に会して絵画、音楽、演劇などを紹介する「とっておきの芸術祭」（芸術祭実行委員会、財団法人日本障害者リハビリテーション協会主催）が開催され⁸⁾、嶋本昭三は、障害を持つアーティストによる『とっておきの芸術祭』⁹⁾をプロデュースし、海外14カ国の障害者を含めおよそ2000人が参加した。この芸術祭に来日したジーン・ケネディ・スミス（ジョン・F・ケネディ大統領の妹）は、嶋本昭三と対談し、障害者に対してあわれみではなく、障害者の社会保障、公共施設の整備、雇用差別の禁止などの配慮が必要であること、また健常者は、障害者の打算のない作品から学ぼう、ということ述べている（1992年3月17日毎日新聞夕刊）。

そして1993年、生きている人間が壁面に展示される『嶋本昭三作品展』開催、1995年、女拓開始、1996年、フィンランドで女拓開催、1997年、ベルギーブラッセル市内ダマスルイネアートギャラリーにおいてスキンヘッドアート展示とパフォーマンス、梅田茶屋町に十字架アートの館、ケルンのアルミン・フンデルトマルクにおいて個展、1998年、大阪心斎橋で空中磔パフォーマンス、サザビーズのオークションで「穴」の作品が28,000ドルで落札、ロサンゼルス

現代美術館で今世紀最大の美術展アクションの中から：パフォーマンスとオブジェクト展で大作2点招待される。1999年、アラン・カプローより講演（具体と21世紀のアートの展望）とパフォーマンス（ビン投げと女拓）の招待、フランスの城で熱気球に乗り作品（21の願いの色を投下）制作、パリの近代美術館で具体展開催され、具体展はその後約2年間をかけて、バルセロナ、イタリア、ミネアポリスなどを巡回する。西宮ヨットハーバーにてクレーンに吊るされて空中から絵の具を落下させるクレーン・パフォーマンスを行った。

2003年、ヴェネチアビエンナーレに招待され、ビン投げパフォーマンス、また京都ビエンナーレにおいて嶋本昭三と弟子の作品『嶋本ミームの教室』展示、2004年、京都国立近代美術館において「痕跡—戦後美術における身体と思考」作品展示、ヴェネチアビエンナーレの殿堂カ・ペーザロで個展開催、カ・ペーザロの美術館に3点收藏される。2005年、東京国立近代美術館において「痕跡—戦後美術における身体と思考」作品展示、そして本稿で取り上げたトレビの美術館で個展、ナノアートとパフォーマンス、サッカー場にてヘリコプターパフォーマンス、2006年、ナポリのダンテ広場でクレーン・パフォーマンス実施などを実施した。

また、コレクションに関しては、1. 国内では、東京都現代美術館、大阪市現代美術館、福岡県立美術館など合計15美術館、2. 海外では、ロンドンのテートモダンミュージアム、ローマのローマ国立近代美術館、パリのポンピドーセンターなど多数のミュージアム、ギャラリーがあげられる。

こうした略歴をふり返ってみると、嶋本昭三は、歩いて感じる作品、大砲による絵画、ビン

投げ、メールアート、女拓、スキンヘッドアートなどのように、大胆で柔軟な発想を持ち、既成概念を打ち破り、誰も行なわなかった新規性に富んだアート作品を発表し続けていること、しかもそれは世界の現代アーティストに影響を及ぼすようなアート作品であることが確認できる。また制作のみならず女性差別、人種差別、戦争反対、地球汚染、障害者問題などの社会的な諸問題にも目をむけ、それらの課題解決に向けて、7,000キロセイクレッド・ラン、平和祈願のメッセージ、障害者と共に行なう『とっておきの芸術祭』プロデュースのように、具体的なアクションを起こしている。

さて、浅野徹一郎は、『戦後美術展略史—1945-1990』（1997：3）のなかで、日本の美術展の特殊性としてデパートの恒常的開催と新聞社の事業活動のすさまじさを指摘している。嶋本昭三の略歴を辿っても、アート作品の展示にデパートや新聞社の関係が読み取れる。また嶋本の場合は、諸外国の関係者や関係機関の協力・協賛（クレーンやヘリコプターの供与など）をもとにアート作品を制作・発表・展示していることがわかる。

Ⅲ. 嶋本昭三の特筆すべきアート作品

次に、嶋本昭三の特筆すべきアート作品について述べたい。筆者（1995, 2004）は、南天棒の書に触発されて作品の上を歩いて感じるアート作品のことはすでに論じているため、ここでは1. メールアート 2. 女拓 3. スキンヘッドアートについて報告したい。

Ⅲ・1 メールアート

メールアートとは、郵便・通信制度を利用し



写真3 嶋本昭三から筆者に郵送されたメールアート

た美術の表現形式である。『現代美術を知る—クリティカル・ワーズ』（2002：36）によると、60年代以降は、このメディアの特性を利用し、郵便やはがきを「作品」に見立てる表現が出現するようになった。嶋本昭三らによって制作され、各地へと送付された55年の「GUTAI」の機関紙はメールアートの先駆とみなしうるほか、松沢宥や河原温なども、この通信手段を作品として積極的に活用した。

と説明されている。例えば、消しゴムを削ってスタンプにし封筒や便箋に何回も押しものを投函する、あるいはするめ、大根、ユニークな形のダンボールを包装せずに必要事項を記入し切手を貼って投函するなど多種多様である（写真3参照）。メールをもらった人は、またその友人にメールを送付する。その結果、ネットワークが次々と構築されていく。立命館大学の教員であるミシェル・ワッセルマン（1988）も、嶋本昭三のメールアートを知り、日仏学館でフランスメールアートの展覧会を企画した結果、手紙を投函した50人のフランス人アーティストからチャームングなもの、皮肉っぽいもの、真面目なものがたくさん送られ、それらはすべて

嶋本個人に対する親しみを示しており、メールアート運動の基盤である博愛主義、平和主義、反核運動を表現していた、と述べている。

では、メールアートの特性は何か。嶋本昭三¹⁰⁾は、次の3点を指摘している：1. アートは特定の人たちのもの、という既成概念の打破であること。例えば、スリッパに切手を貼って、包装しないで送る。今までアートに無縁だった人でも参加できること。誰でもできるというと、低俗に思われるが、実はそうではない。経済的で時間や場所がなくてもできる身近なアートということである。2. ネットワーキングアートであること。手紙という手段を使って、世界中の人たちと情報交換をすることができる。1通のメールアートを送ると、それに新しい文字や絵が加味され、また新しいアートとして返ってくる。3. ヒエラルキーからの解放。アート作品は、画廊で売買されたり、展覧会で入賞したら落選したりすることがあるが、こうしたことはアート作品の階層化につながりかねない。ところがメールアートには、お金や賞に無縁であることから、より純粋なアートということができる。

Ⅲ・2 女拓

女拓とは、裸体に墨を塗られた女性が、用意された等身大の、細長い和紙のキャンバスにさまざまなシルエットを描くというものである。筆者の体験からすれば、キャンバスにシルエットを描くためにポーズを決め、うつ伏せ、側面、仰向けになる。この場合、描くというよりはキャンバスへ倒れこむ、あるいは飛び込という表現のほうが適切である。ユニークなポーズのためには、オリジナリティの追及、造形の検討、美への欲求などを考慮しなければならなか

ったし、キャンバスに倒れこむ時に勇気も必要であった。1回に数枚の女拓を取った後、最後に日付、本人のサイン、ネットワーキングの意味で『昭三^{ネットワーク}網』という朱を押印して作品は完成する。嶋本昭三は、1996年2月10日神戸元町通りにある海文堂ギャラリーで開催された女拓のオープニングパーティで次のように述べている。

嶋本昭三に墨を塗られた女たちは、用意された和紙の上に身を委ねます。あるときは、もだえるように、あるときは泳ぐように。かくして女拓は表現されます。女性達は自らの意思で裸体になります。これは男性達にとって理解できないようです。嘗て女性が裸体になることは、男性の着想に基づいたものでした。今では女性達は自らの手で美しさを表現しようとしています。

彼はこのように述べながら、自分自身は女性解放者でも宗教家でもなく、女拓によって女性とネットワーキングするのだ、と述べている。さらにヘアアーティストであり、嶋本昭三の弟子でもある半田まゆみ（1995：67）は、次のように述べている。

魚拓の場合、魚は動かないが、拓を取る女たちは体を動かす。心も動く。女の悲哀、歓喜、母性、虚栄、美への追及…。感情で生きるといわれる女がすべてをそこに映し出しているようである。魚拓のように形状を写しとるのではなく、自分の好きなように動き、細心な心の躍動を表現しようとしている。まさしく「女拓」そのものは、生きている。(略)墨を塗った肌の質感や体のプロポーション、拓をとったあとの肌色と黒とのコントラスト。まるで黒檀の彫刻のように輝いている。

女拓は、女性を被写体とするヌード写真とは意味合いや質感が異なっているし、水墨画に似てはいるが、水墨画には反映されない女性の意思、感情、情熱などが表現される。

つまり女拓は、女性が全身で能動的に表現しようとするものであり、女性が自由に自己を表現できるようになった社会の現れであると言えるかもしれない。

Ⅲ・3 スキンヘッドアート

スキンヘッドアートとは、嶋本昭三が自分の頭をつるつるに剃り、それをキャンバスにみたくて、様々な人々に絵の具や墨でメッセージを書いてもらったり、スライドのスクリーンにするなど、スキンヘッドを利用したアート作品のことである。また彼は、自分のスキンヘッドの写真の世界の元首に送付し、その上にメッセージを書いて返信してもらっている。これまでに、フィリピン、スイス、スペイン、サウジアラビアなどの国の元首から返事が届いている。頭をメディアとして使うきっかけは、イタリア人アーティスト、G. A. カベリーニを日本へ招聘し¹¹⁾ 大阪の四天王寺を案内したことに由来している。カベリーニは、メールアートの天才ともいわれ、至る所なんにでも自伝を書くことで有名である。嶋本昭三は、四天王寺の住職に頭に「カベリーニの自伝を書かせてもらえないか」と頼んだが、住職に拒否された。そこで得度もせずに住職に頭髪を剃ってもらったのがはじまりである（嶋本昭三1994：44、京都教育大学広報1988年、新美術新聞1991年8月11日）。

このようなスキンヘッドアートを嶋本昭三は、海外でも行なっている。毎日新聞（1992年3月4日）では、「欧米を回って自分の言いた

いことを頭に書いてもらった。いつも100人くらい集まってね。ヘッド・ネット・ワーキングという。」と記載されているし、ダルムシュタッド（独）の新聞 Darmstaeder Echo（1991年12月2日）でも、嶋本昭三のスキンヘッドアートに関して、ダルムシュタッドの人々がこれまで見たこともないアートであり感嘆した、と報道されている。さらに嶋本昭三は、スキンヘッドを利用して朝日新聞阪神支局襲撃事件で凶弾に倒れた新聞記者の追悼パフォーマンスを行い、スキンヘッドの上にレオタード（あるいは水着）を身につけた女性のお尻を乗せた写真で「女性差別反対」を唱えている。

Ⅳ. 嶋本昭三が影響を受けた要因

嶋本昭三は、何に影響を受けて上記のようなアート作品を制作してきたのだろうか。筆者は、主なものとして以下の4点を指摘したい：

1. 吉原治良の指導
2. 南天棒の書
3. 幼児及び知的障害のある子ども
4. さまざまな人々とのネットワーク。

1. 吉原治良の指導。前述したように吉原は、弟子たちの作品制作について、技術面ではなく根本的な姿勢に対して「誰もやったことのないことをやれ」という方針を一步たりとも譲らなかった。その時に交わされた弟子たちの激論が、その後の具体の基盤を確立することになる。したがって嶋本昭三は、師の教えを忠実に守り、今日まで誰もしたことのない、アート作品を制作することになる。また吉原は、過去の美術品や建築物の時代の損傷や災害による破壊の姿に、現代的な美しさを見出し、それは人工のかけから本来の物質が露呈し始めた美しさではないか、とのべてい

るが、注目すべきは具体の作家たちが、破壊の痕跡を作品として再提示したことにある（京都国立近代美術館2004パンフレット『痕跡—戦後美術における身体と思考』：10-11）。

2. 南天棒の書。その当時の画家たちには、モンドリアンの作品をいかに乗り越えるという問題意識が根底にあった。嶋本昭三は、西宮の海清寺にある南天棒の書を眼にしたとき、モンドリアンの作品には時間性、つまり時間と共に墨がかすれたり、にじんだりするという時間の要素が欠如していることに気づいた。そしてアート作品にどのように時間性を持たせるのかを模索した。その模索の帰結として、歩いて感じる作品などになった（遠藤保子、1995：66、2004：108-109）。

3. 幼児や知的障害のある子ども。嶋本昭三（2001：15）は、普通の絵描きと障害者の目のつけ所が違い、常識よりも価値観や感覚が優先する障害者に大きな影響をうけたと述べている。大学卒業後、障害者の中学校の教師になった経験が大きくかかわっていると考えられる。

4. さまざまな人々とのネットワーキング。メールアート、女拓、スキンヘッドアートなどに共通することは、さまざまな地域、いろいろな国々、異分野の人々とのネットワークである。最近では、前述したようにサイエンティスト杉山進とのネットワークによってナノアートを制作している。浅野徹一郎は『戦後美術展略史-1945-1990』（1997：5-8）のなかで、アーティストとサイエンスとの結びつきをこのように指摘している：

カンディンスキーが1910年、抽象画に転じたきっかけのひとつが、原始物理や核物理の書物を驚きをもって読み、現実感覚が崩

壊していくのを感じということ。ピカソとブラックが1907年、キュビズムを創始したことをアインシュタインの「特殊相対性理論」と関連づけて認識されていること。つまりこれは、いちどに多くの視点からものを眺めるキュビズム絵画が、対的基準軸の存在を認めない「特殊相対性理」の絵画版であるとの理解である。20世紀文明は、科学とそれを土台に発達した技術によって支えられている以上、カンディンスキーやピカソの事例は、美術も科学的認識を度外視しては検証できなくなっている。

と興味深い見解を述べている。では、サイエンティスト・杉山進とコラボレーションした嶋本昭三は、どのような変容をとげたのだろうか。

嶋本昭三の聞き取り調査¹²⁾によれば、これまでは、遠い宇宙に思いをはせたり、表層をなぞったり、内面を考えたことはあるが、1ミリ以上のより小さな世界を検討したことはなかったため、杉山進とコラボレーションは大きなインパクトがあった、という。ただし、カンディンスキーやピカソのように具体的な形としてアート作品に反映されるまでにはいたっていない。

いずれにせよ、嶋本昭三は、常にさまざまな人々とネットワークを形成し、継続し、人を驚かせている。彼は『芸術とは人を驚かせることである』を著しているが、まさにかれの略歴そのものが、人を驚かすものであり、人生が芸術であるともとらえられる。

おわりに

筆者は、これまで嶋本昭三とさまざまなことを実践してきた。筆者が京都教育大学の教員で

あったときは、同僚として嶋本昭三といっしょに授業を担当し、花と緑の博覧会でパフォーマンスを行い、女拓に加わり、本稿でとりあげたナノアートとパフォーマンスを行ってきた。それらを通して感じることは、彼の積極性、独自性、革新性である。

嶋本昭三は、今後どのような衝撃的アート作品を発表するのか、どのようなユニークな企画をプロデュースするのか、そしてそれらがどのように社会とかかわっているのか、など、これからも多面的に検討・考察していきたいと思っている。

参考・引用文献

- Giancarlo Politi, Internatioal Edition 1991 *Flash Art*—the leading European Art Magazin Vol. xxIV May/June No. 158 Borgo Trevi ITALY
- 遠藤保子 1995 「パフォーマンスとオルターナティブ・スペース」立命館大学産業社会学会『立命館大学産業社会論集』第31巻第3号 pp. 65-79
- 遠藤保子 2004 「身体表現の世界」佐藤嘉一編著『〈方法〉としての人間と文化』ミネルバ書房、京都 pp. 98-111
- 遠藤保子他 1998 財団法人水野スポーツ振興会研究助成金研究成果報告書『舞踊における「劇場」的空間の変遷』
- 遠藤保子他 2002 1999年度～2000年度文部科学省科学研究費補助金基盤研究B(2)研究成果報告書『マルチメディア時代に対応した総合芸術のファカルティデベロップメント研究』
- 京都国立近代美術館、東京国立近代美術館主催 2004 『痕跡—戦後美術における身体と思考』カタログ
- 暮沢剛巳編 2002 『現代美術を知る—クリティカル・ワーズ』フィルムアート社、東京
- 産経新聞(夕刊)1998年2月28日「嶋本昭三さん 戦後現代美術の“起源”」
- 嶋本昭三 1988 京都教育大学『広報』No. 70 pp.

2-3

- 嶋本昭三 1990 『SHOZO SHIMAMOTO NETWORKING』アートスペース、西宮
- 嶋本昭三 1994 『芸術とは、人を驚かせることである』毎日新聞社、東京
- 嶋本昭三 2001 「トーキング・セクシーヘッド 嶋本昭三」京都芸術センター『アートと交叉するハイパーリンク批評誌 Diatxt. ダイアテキスト05』、京都 pp. 8-27
- 嶋本昭三 2001 『ぼくはこうして世界の4大アーティストになった』毎日新聞社、東京
- 末永照和監修 2000 『20世紀の美術』美術出版社、東京
- Stokstad Marilyn ed. 1999 *Art History Revised Edition* Vol. 2 Harry N. Abrams, Inc. Publishers, New York
- 竹田直樹 2004 「京都ビエンナーレ2003『スローネス』」『SOTOKOTO』1月号 pp. 1-2
- 東京国立近代美術館編 1996 『身体と表現1920-1980ポンピドーセンター所蔵作品から』NHKプロモーション、東京
- 半田まゆみ 1995 「女性も知らない女性の世界 女拓」嵯峨御所大覚寺嵯峨御流華道総司所発行月刊嵯峨別冊『心粧』冬号19号、京都 pp. 66-67
- ミッシェル・ワッセルマン「メール・アートをご存知ですか?」京都新聞 1988年5月17日
- 読売新聞(夕刊)2003年10月17日「京都ビエンナーレ」
- ランガー、S. 池上保太他訳1967 『芸術とは何か』岩波書店、東京

注

- 1) この展覧会は、1940年代から70年代にいたる美術の様々な局面で顕在化する、アクションの諸相をテーマに、現代美術を新たな側面から検証することを目指したものである。企画者は、主任キュレーター、ポール・シンメル。その内容は、3部から構成されており、具体美術協会は、第1部1947-59で展示された。また嶋本以外の4大アーティストは、ジャクソン・ポロック、ルーチョ・フォンタナ、ジョン・ケージで

- ある。
- 2) 地上でビン投げをするばかりではなく、熱気球に乗り、クレーンで吊り上げられ、最近ではヘリコプターに乗りこみ、空の上から「ビン投げ」を行っている。
 - 3) 2006年8月2日 甲子園口アートスペースにてパーソナルインタビュー。
 - 4) 嶋本昭三はまた、このときの様子を現地からのレポートとして毎日新聞（1993年8月19日、21日、26日、27日、28日）に連載している。
 - 5) カブローが「具体」を世界に広めて30数年後、嶋本昭三とカブローは、台湾で講演とパフォーマンスを計4回共同で行っている（嶋本昭三2001：134）。
 - 6) 筆者もヘアアーティスト半田まゆみ、兵庫教育大学の畑野裕子らとともにパフォーマンスを行った。
 - 7) この美術館に関しては、1991年7月4日朝日新聞（夕刊）、1992年2月23日読売新聞、同日毎日新聞、同日産経新聞に掲載されている。
 - 8) 1992年3月17日 毎日新聞（夕刊）「とっておき 障害者の芸術祭」として報道された。
 - 9) この芸術祭の趣旨は、1. 芸術活動を行っている障害者の発掘 2. その芸術活動を助長するための事業、環境づくり、そして目的は、1. 一般の人との交流 2. 多様性を認める社会の実現である。嶋本昭三は、この芸術祭の企画研究委員会のメンバーとして参加し、積極的に運営に協力した。芸術祭の企画の概要は、1. レセプション 2. 展示（絵画、書、彫刻、工芸、写真）3. ステージ（音楽、器楽、演劇、ダンス、トーク、その他）4. 映像（障害者の創作活動ドキュメンタリー、障害者問題についての映画VTRの上映）5. ワークショップ（制作過程をみせるもの、来場者が自由に参加できるもの）6. シンポジウム（障害者芸術に関する国内外の学者、文化人による講演会やシンポジウム）7. イベント（全参加アーティストによる野外でのパレードやパフォーマンス）である。
 - 10) 1998年3月5日、甲子園口アートスペースにてパーソナルコミュニケーション。
 - 11) 嶋本昭三は、日本招聘したカベレニに関する詳細（メールアート、パフォーマンス、十字架などのアート作品）を報告書にまとめている。嶋本昭三1986『Cavellini 1914-2014』甲子園口アートスペース 全28頁。
 - 12) 2006年8月2日 甲子園口アートスペースにてパーソナルコミュニケーション。

Contemporary Artist SHIMAMOTO Shozo and Performance

ENDO Yasuko *

Abstract: The contemporary artist SHIMAMOTO Shozo worked with SUGIYAMA Susumu, Professor of College of Science and Engineering, Ritsumeikan University, to create nano art – the smallest art works in the world – and presented the work at Trevi Flash Art Museum (Italy) in 2005. For the exhibition, I accompanied them to Italy to do a live performance against the background of their nano art. Based on this experience, this paper explores four key elements: (1) nano art and performance: nano-art creation process and performance against the background of nano art, (2) a profile of SHIMAMOTO Shozo: his major art works and activities, (3) his notable works – mail art, *nyotaku* (ink rubbing of a female body on paper) and skin-head art – and (4) factors influencing his art.

In addition to the exhibitions of his avant-garde, innovative and daring works, SHIMAMOTO Shozo has called for the elimination of discrimination against women through his works. He also participated in the Sacred Run held in Europe, which is an annual running event proposed and planned by Native American Dennis Banks as part of his efforts to fight against racial problems and for global environmental protection. Major influences on SHIMAMOTO are (1) YOSHIHARA Jiro, (2) the writing of Nantembo, a Japanese Buddhist monk, (3) paintings by infants and mentally-handicapped children, and (4) his broad network including people in various fields.

Keywords: nano art, performance, SHIMAMOTO Shozo, mail art, *nyotaku* (ink rubbing of a female body on paper), skin-head art

* Professor, Faculty of Social Sciences, Ritsumeikan University